



Title	グローバル社会における異民族間の共生と民族宗教のダイナミズム : 東アジア社会の華人ネットワークの再編成 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	翁, 康健
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(人間科学)
Dissertation Number	甲第15983号
Issue Date	2024-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/92290
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Kangjian_Weng_review.pdf, 審査の要旨



学位論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（人間科学）

氏名： 翁 康健

主査 教授 櫻 井 義 秀
審査委員 副査 准教授 伍 嘉 誠
副査 教授 宮 嶋 俊 一

学位論文題名

グローバル社会における異民族間の共生と民俗宗教のダイナミズム

—東アジア社会の華人ネットワークの再編成—

・当該研究領域における本論文の研究成果

国際社会学や移民研究においては、移民とホスト国市民との関係が長らく研究の焦点であった。特に移民が持ち込む文化伝統や生活様式、とりわけ宗教文化が、ホスト社会にどう適応していくのかについて、ホスト国による同化政策や市民社会の容認度、移民側の安定的定着のための文化戦略などが議論されてきた。そうした議論の場は主としてヨーロッパ圏であり、宗教文化もイスラームの移民とキリスト教文化圏のホスト国という想定が主であり、そこで「多文化主義」や「多文化共生」がリベラルな政策として打ち出され、現象としての「宗教多元化」が分析の対象にもされてきた。

本論文は、東アジア・東南アジア地域においてグローバル化を考察した場合、従来の研究枠組みでは適切に理解できない移動の仕方や、華人の移動の歴史には新しい文化の構想力があると主張する。すなわち、近世末期から近現代にかけて圧倒的なボリュームで華僑・華人が東アジアや東南アジア諸国に移動し、東アジアの台湾では外省人として中華民国を形成し、韓国と日本では華僑社会を形成した。東南アジアにおいては、大陸部のタイでは同化の後に政治経済上層を華人系タイ人がしめるという上昇移動を果たし、半島部ではマレー民族に対抗されながらもシンガポールという華人国家を形成し、マレーシア、インドネシアにおいて経済力を握る華人エスニック集団として存在感を示している。

このような東アジアや東南アジア地域において、グローバル化の時代にどのような宗教文化の変容が生じ、多文化主義や宗教多元主義といった状況が見られるのかと大胆な問題提起を行うのが本論文である。

なお、本論文のもう一つの特徴は、華人の民俗宗教を研究対象にしていることである。中国本土には漢訳仏典に基づく中国仏教やチベット地域の蔵伝仏教、西域や都市に居住する回族のイスラーム、近年急増している天主教（カトリック）や改新教（プロテスタント）という制度宗教と、中国文化に内在する道教や儒教という道徳まで幅広い宗教文化が存在する。しかし、本論では中国人固有の生活様式や家族・地域文化に内在する民俗宗教の儀礼（祖先祭祀から同郷集団の祭礼、菜食文化など）を対象に据え、民俗宗教の文化適及力をホスト社会への適応過程において考察するというユニークな問題設定を行っている。

さて、具体的に、本研究の調査は2016年から2023年の間に、①中国福建省の祖廟祭祀、②日本の神戸における普度勝会、③タイ中部と南部における菜食実践、および④マレーシアの華人ムスリムの改宗について4つの事例のフィールドワークとして行われ、②と③では補足調査のための渡航も行われている。

本研究の学術的貢献は三点にまとめられる。

第一に、4つの事例を通して、華人—チャイニーズネスというアイデンティティはエスニックなレベルから文化的なレベルにまで柔軟に操作され、表出されることが理解された。元来は宗族や地域の共同性を確認する文化であったものが、移民先のホスト社会ではイベントの際に華僑/華人の内

部で出身の省や言語単位でグループ（「包」）が形成されるものの、日本社会やマレーシア社会に対応するときには華人としてひとまとまりになったりする。また、タイのように土着化後にエスタブリッシュメントに移行しているような社会においては、菜食は華人というアイデンティティとは関連せず、個人の文化的指向性を示したり、スピリチュアリティの指標として活用されたりする。

第二に、華人の民俗宗教を研究対象に据えたことで宗教葛藤や宗教多元化とは別の状態、本論文では「カオスではないが固定化されたコスモスには至らないダイナミズムを生み出す状態—混沌」にある宗教文化という特徴に言及できた点である。これは従来、アジアのシンクレティズムとして整理されてきたが、「混じり合い」の状態から「ハイブリッド」な新しい宗教性を産み出す状態として示唆できている点が興味深い。

第三に、4つの事例研究はいずれも国内外の学会で口頭発表され、2つの事例研究は査読付き学会誌に掲載されている。また各事例研究が、フィールドワークのみならず、事例や対象の文献研究や統計的データの資料整理などをふまえており、可能な限り多角的にデータを扱おうとしている点が社会調査研究として厚みを加えている。

以上の調査内容に関して、申請者は、本論文の口頭試問において審査委員からの質問にもおおむね適切に回答し、研究の達成と課題について十分に考察していることがうかがえた。

・学位授与に関する委員会の所見

本委員会では、申請者が日本で学部学生と大学院生の期間、約12年にわたり学習を積み重ね、博士論文の各章をなす調査研究を行い、学会で成果を問い、相応の評価を得ている状況からして、申請者が学位取得に必要な条件を満たしているとの認識に到った。

しかしながら、申請者も自覚していることだが、本論文にも課題があるので念のため記載する。

第一に、調査期間が約8年間に及んでいるために、調査初期・中期、まとめの段階の問題意識の揺れが見られ、本論全体の問題設定が必ずしも一貫していない部分が見られたこと。また、4つの独立した異なる地域での事例研究を行ったことに起因するが、申請者はその時々々の事例研究に即した概念を使用しているために、事例と概念との対応が首尾一貫していないところも散見された。博士論文をさらにブラッシュアップして一書にまとめ上げる場合には、さらなる推敲が必要である。

第二に、中国人留学生が中国での調査研究のみならず、日本、タイ、マレーシアとフィールドを拡大し、日本語とタイ語で現地調査したこと—それが可能になるまで語学の学習を重ねたことは大いに評価に値するのだが、地域研究の専門誌の水準では、いささか各事例とも分析に詰め甘さを残している。国際社会学の分析水準は十分達成しているものの、学問領域のフロンティアに達する問題設定の工夫をさらに求められることになるだろう。

これらの課題は、申請者が研究者として独り立ちできる水準にあるために目に付くところであって、博士論文としての体裁において瑕疵にあたるものではない。

以上、本論文は、華人の民俗宗教と移民研究の実証的研究として学術的貢献が相応にあるものと認められ、審査委員会では全員一致で、本論文提出者に博士(人間科学)の学位を授与可能との結論に達した。